

追 悼



故 伊藤 拓 先生 略歴
(1936年3月31日生—2006年6月21日没)

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1960年3月 慶應義塾大学医学部卒業 | 2001年10月 東京地方裁判所民事調停委員 |
| 1961年6月 慶應義塾大学医学部助手(小児科学) | 2002年5月 日本児童家庭文化協会理事 |
| 1970年7月 都立清瀬小児病院腎内科医長 | 2002年7月 日本小児腎臓病学会功労会員 |
| 1985年12月 都立清瀬小児病院小児科部長 | 2006年4月 日本腎臓学会名誉会員 |
| 1992年4月 国立小児病院副院長 | |
| 1992年5月～2002年3月 慶應義塾大学客員教授 | |
| 1995年6月～2001年6月 日本小児腎臓病学会理事長 | |
| 2000年4月 国立小児病院院長 | |
| 2001年3月 国立小児病院退職 | |

伊藤 拓先生を偲んで

日本小児腎臓病学会元総務委員長
日本小児保健協会会長

村上睦美

伊藤拓先生は、小児腎臓病の専門家としてはわれわれ第二世代の旗頭でした。

小児腎臓病の専門医を標榜した第一世代の代表としては、日本小児腎臓病学会発足の際の発起人であった新潟大学小林収教授、東京大学高津忠夫教授、日本医科大学村上勝美教授らがあげられ、活動的なメンバーとしては大阪大学蒲生先生、名古屋大学中江先生、京都大学奥田先生、東京大学佐藤先生などがいらっしました。これら第一世代の先生方は小児腎臓病の概念の確立、それらに則った診断法、治療法の確立に尽力なさいました。さらに1974年から始まった学校検尿システムの作成、検尿方式の確立は第一世代の先生方のご功績です。

これら第一世代の先生方は、小児腎臓病の専門医であるとともに他の専門領域をお持ちでした。あえて言えば、他の専門をお持ちの先生方が腎臓病にも取り組むといった姿勢でした。

これら第一世代に対し、第二世代は最初から小児腎臓病を専門とした世代で、先生は北里大学の酒井糾教授、東京女子医科大学の伊藤克己教授とともにわれわれの世代をリードしてくださいました。

先生は1960年に慶應義塾大学医学部をご卒業、1969年に小児科助手から都立清瀬小児病院へ赴任なさり、1970年に小児腎臓内科を開設、医長に就任なさいました。お聞きしたところによると、木造病棟を改築し、2台透析装置を備えた透析室を作り、腎内科として泌尿器科の川村猛医長のご協力を得て透析療法が始まったとのこと。1972年には手術室、1974年に現在の透析室に移り慢性腎不全児に対する本格的な治療が始まりました。それらに加え、1975年、前年に泌尿器科腎移植担当医長に就任なさいった長谷川昭先生(現西横浜国際総合病院院長)によって第1例目の小児生体腎移植が行われました。

このようにして、先生を中心に小児腎尿路系疾患の総合的一貫治療体制が都立清瀬小児病院に確立されました。特筆すべきは、その後都立清瀬小児病院腎内科は著しい進歩を遂げ、数年を経ずにわが国有数の小児腎臓病診療施設になったことです。その間の先生と長谷川理先生(現西横浜国際総合病院副院長)のお仕事ぶりは小児腎臓病の診療に当たっている者の間では伝説でした。そして現在では、わが国の新規透析導入患児の20%近くを取り扱うようになり、新規の腎炎・ネフローゼ症候群の取り扱い患児数も年間100例以上に及んでいます。

先生の臨床的研究の課題はWHO分類に則った糸球体腎炎の分類、治療、ステロイド抵抗性ネフローゼ症候群の治療、小児期慢性腎不全の治療、管理など、その当時小児科医が最も必要とした研究でした。先生は慶應大学病理の坂口弘先生、当時の神戸大学小児科の吉川徳茂先生(現和歌山大学小児科教授)と共同で各種糸球体腎炎の臨床ならびに病理学的な研究をお始めになりました(Ito H, et al. Clin Nephrol; 1984)。これらに続く研究はその後多くの成果を生み、国際的に高い評価を得ている現在のIgA腎症研究会が行っているIgA腎症のRCTまで引き継がれています。ステロイド抵抗性ネフローゼ症候群の治療に関する研究は、当初先生ご自身でなさっていましたが、その後若い先生方に引き継がれ、現在も東京都立清瀬小児病院腎内科の主な研究課題の一つになっています。先生の最も顕著なご功績は慢性腎不全の子ども達に対するもので、多くの臨床的研究を発表なさいました。そのなかでも1980年のCAPD導入後の乳児に対する透析療法では、その良好な治療成績は世界的にも注目されています(Honda M, et al. Kid-

ney Int : 1993)。

基礎的な面の研究としては、先生がご指導になった都立清瀬小児病院腎内科では慶應大学小児科の腎研究グループと共同で、腎不全の代謝異常の研究、遺伝子異常の研究などを中心に動物実験を含め広く研究をなさっております。その結果、現在では毎年 20 編以上の論文が発表されており、この面でもわが国小児腎臓病の分野で指導的な立場にあります。

その後、先生は 1985 年に都立清瀬小児病院の小児科部長に就任なされ、さらにその行政的な手腕を買われ 1992 年に国立小児病院副院長、2000 年には同病院の院長におなりになりました。その間のお仕事については詳しく伺ったことはありませんでしたが、先生が副院長、院長でいらした時期は国立小児病院が成育医療センターへ移行する時期でしたので、非常にご多忙であったことと思います。

先生が日本小児腎臓病学会の理事長にご就任になったのは 1995 年 6 月で、ちょうど学会の社会的貢献が問われ始めた時期で、日本小児腎臓病学会でもいろいろな調査研究を始めました。先生はそのような面でも常に積極的であり、① HUS 発症についての全国調査、② 腸管出血性大腸菌に伴う HUS の診断治療ガイドラインの作成、③ 腎生検の実態と合併症についての調査、④ ANCA 関連腎炎の調査研究、⑤ 小児期腎不全データベースの作成、などを指導なさいました。同時に学会の機構整備をなされ、ホームページの作成、理事会の電子化など日本小児腎臓病学会の近代化にご尽力なさいました。

先生はかなり凝り性でした。例えば趣味の二輪車は、私が知っている範囲ではヤマハで始まり、BMW ボクサー、ビモータ、ドゥガッティと移り、最後にまた BMW ボクサーにお戻りになっています。ビモータはイタリア製の骨格に日本製のエンジンを乗せたオーダーメイドに近い二輪車で、日本に数台しか入っていないものですし、ドゥガッティは高回転型のエンジンですので、町中を走るとクラッチを握る左手がつってしまうような代物でした。

先生はご定年後、東京裁判所民事調停委員、日本児童家庭協会理事などのボランティア活動をなさっておりました。私としましては、先生が今後どのようなお仕事をなさるかではなく、むしろどのような趣味の世界を目指していらっしゃるかに注目しておりました。

こんなに早くご逝去なさるとは思ってもみませんでした。先生がご指導なされた都立清瀬小児病院の腎内科はわが国で一二を争う小児腎臓病の総合医療機関の地位を維持しており、全国から腎臓病の子どもを集めております。さらに先生に面倒をみていただいた日本小児腎臓病学会は先生がお作りになった構造基盤に基づいて順調な発展を遂げております。

先生のご冥福を心からお祈り致しております。